世界交差点　World×Intersection

WhiteEight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界交差点　Ｗｏｒｌｄ×Ｉｎｔｅｒｓｅｃｔｉｏｎ

【Ｎコード】

Ｎ９４６０Ｇ

【作者名】

ＷｈｉｔｅＥｉｇｈｔ

【あらすじ】

小さな村に突如現れた謎の少女。彼女と接するうちにこの世界の知られざる地球の真実が見えてくる。主人公・蒼葉マサキは彼女と出会い、大きな運命の渦に飲み込まれていくことになる…。ミステリーありバトルあり、ちょっと切ない恋あり…長編ＳＦファンタジー！

第一話　白羽那由多（前書き）

とにかく自分が書きたいものを書いていこうと思います。
主人公同様、発展途中ですが、一緒に成長できたらと思います。

第一話　白羽那由多

「暑いなぁ…はぁ……」

悠太は雲一つない蒼穹を見つめてため息をつく。

「そりゃ7月なんだから暑いのは当たり前だろ…？暑いっていうなよ…ますます暑くなる…」

炎天下の昼下がり、二人はある場所を目指し歩いていた。
伊佐奈村の山奥にある館である。

ちなみに伊佐奈村というのはこの二人も住んでいる人口１０００人程の小さな村だ。

四方を山に囲まれてはいるものの、それほど深い山々ではなく、徒歩で抜けることも出来る。
また抜けた先には街もあり、決して都会とは言い辛いがそこまで酷い田舎というほどでもない。

ただ若者ばなれは否めなく少子化も伴い、彼らの通う村の高校も来年の４月をもって廃校が決まった。

話がズレてしまったが、そんな村に久々の移住者がやってきたということで噂になったのだ。
好奇心旺盛な二人は、こんな田舎に引っ越してくる物好きの顔を一

目見ようと館に向かっているのだ。

「おい悠太、もう伊佐奈山だぞ。頑張れ！」
「ま、待ってくれよマサキ…」

２，３０ｍ後ろでへばりながら歩く悠太。

言いだしっぺのお前が先にバテてどうすんだよ…。
ったく…。

ザザッ…

「！」

ん…？
今誰かがこっちを見ていたような…。

「はぁ…はぁ…追いついた…。ん？どうしたんだ？森をぼんやり見つめちゃったりして？」
「いや…気のせい…だよな？」

「んじゃま、行きますか！てか山に近づくとより一層セミがうるさいな」

「そう言ってやんなよ。蝉は短命なんだからよ。それに山の中のほうが断然涼しいし」

「だな…よっし行くぜマサキ！」

俺たちが向かう館は知る人ぞ知る、一部では”幽霊屋敷”と呼ばれている古びた洋館だ。
なんでも１０年以上空き家だそうで、以前住んでいた家族が謎の死を遂げたという”いわくつき”の館で、
村の子供たちには恰好の心霊スポットというわけだ。

また、館で謎の人影を見たとか、夜に人魂を見たなどと…噂は年々増えていく一方である。

というものの、実際には俺も悠太もそういった類のものは見たことはなく…
所詮ただの噂だろうという結論にいたっている。

「おいマサキ！見てみろよ」
「ん？」

悠太が地面を指差している。

これは…タイヤの跡だな。
洋館に続く道は自動車１台分くらい通れるくらいのスペースはある。

まぁ一応村からも多少距離もあるし、坂を上がった山奥にあるわけで、車がないと不便な場所だろうとは思う。

ガサガサッ！

「ん！？」

「どうした？マサキ」

やっぱり…何かいる気がする…。

なんだろう？

……見られてる…？

この時

何故だろう？

そこにいるわけでもなく――――

見えているわけでもないのに――――

俺は

彼女と眼があっていた。

わけもわからず、ただ漠然とそう思った。

「…悠太、悪い」

「え？…ってちょっと！？何処行くんだよ！？マサキ！？」

走り出していた。

こんな感覚…今まで感じたことがなかった。

一体なんなのか？

あれほど耳についていた蝉の声はいつの間にか聞こえなくなっていた。

風を切る音と、自分の鼓動と、そして呼吸音だけが響いている。

「…はぁ…はぁ…」

気がついたら俺はそこにいた。

見たことのない洞穴の入り口に立っている。

辺りを見回すと、そこはいつもの伊佐奈山の風景だ。

「こんな場所…あったっけ？」

目の前には吸い込まれそうな闇が広がっている。

普段の自分じゃこういったデンジャーは当然のように避けるのだけど…なぜだろう？

さっきの感覚に似た…何かが俺を”呼ぶ”感覚。

でも、さっきのような衝動的な力強さはない。

なんというか、”選ばされている”感じがする。

ここに導いたのは強制…

でも、この先は自分で決めろ…そういうことか？

「…」

こういう時、一歩踏み出す勇気がないのが自分なんだと、つくづく思わされる。

「…サキーッ！？どこだーー？」

悠太の声だ。
俺を追ってきたのか。

悠太があちらこちらと見回しているようだ。

二人なら、きっと戸惑うこともないし。
悠太はこういうの大好きだからな。

「悠太ーッ！おーい！」

「マサキーーーッ！」

ん??声が届かない距離じゃないと思うんだけど…なんで気づかないんだ??

「おーいッ!悠太!聞こえないのか!?」

俺は特に何も考えることなく…
本当に何気なく一歩を踏み出していた。

「おーい!こっちだってば!」

「あッ…あんなとこに…!マサキの奴!!」

ようやくこちらに気づいたのか、悠太はムスっとした顔をしてこちらに歩いてくる。

「おま!急に走り出したかと思ったら、なんなんだよ!探し回ったんだぞ」
「悪い悪い!それよりさ!面白いもん見つけたんだよ!」

マサキはそう言いつつ、後ろを指さした。

「?」

あれ？
いつもならこういうネタには、物凄いリアクションで飛びつく悠太なのに、何故か無反応でクビをかしげている。

「マサキ、どうしたん？暑さにでもやられたか？」
「いや、どうしたのじゃなくてだな！この洞穴…」

後ろを振り返ると、そこにはさっきまで確かに存在していた洞穴の姿が跡形もなく消えていた。

「え…？」

「洞穴ってなんだよ？ただの茂みじゃんそれ」

う、嘘だろ！？
さっきまで確かに…！

マサキが指差す先にはただの茂みがあるのみ。

急いで茂みをかき分けてみるものの、茂みの奥には茂みが広がるのみである。

「うっそー…」

「もういいっての！はぁ…。この暑いのに面白くないっての」

夢…だったのか？

本当に夢でも見ていたのだろうか…？
でも…あのリアリティ…。

「おら、マーサーキーッ！館に行くぞッ！」
「お、おお…」

釈然としないけど…。

まっ…いっか。

―――伊佐奈山・幽霊屋敷前

「ふぅ…緩やかとはいえ…上り坂はしんどいなぁ…はぁはぁ…」
「悠太疲れすぎ…高校２年とは思えない台詞だな…」

「お、お前が元気すぎるんだってば…」

館の門前まで来て、改めて館の外観を見回してみると…やはり何処となく”雰囲気”がある。
まだ日も沈んでいないというのに、何かが出るような…そんな異様な雰囲気が漂っている。

「久しぶりに来てみたけど、相変わらず…おっかねぇ感じだよな…マサキ」
「そうだな…。でも見てみろよ」

「ん？」
「ほら、玄関先に軽トラが停まってる」

人は居るってことだろうな。
一体どんな人が越してきたんだろう？

こんなおっかない場所に越してこなくても、村にも空き家はあるのに。
よほど物好きなのだろうか？

その時だった。

ガチャ

『！！』

悠太とマサキは同時に肩を震わせた。

玄関の扉が開いたのだ。

二人は急いで茂みに身を隠した。

「！」

二人が見たのは、なんとも言いえぬ不思議な雰囲気の少女だった。

「お、女の子…だ」

「あ、ああ…」

不覚にも見とれてしまった。

遠目だが、なんとなく可愛い感じがする。

年は…どうだろうか。俺たちと同じくらいか。

「…」

！！

彼女がこちらに視線を送った。

二人は思った。

『バレた！』

「そこに隠れている人…村の人…ですか？」

可愛い声だ。

って…そんな場合じゃないだろ俺。

「お、おい…どうすんだよマサキ」

「俺に聞くなよ！ば、バレちゃってんだから出るべきだろ？」

仕方ない…よな。

「ご、ごめんなさい…あの俺たち、別に怪しいものじゃ…」

「そ、そそ！別に物好きを見にきたなんて、そんなんじゃないから

！」

「お、おい！悠太！」

「あ…」

あじゃない…。

「！」

彼女が俺を見ている…。

なんだろう…？

この感じ…何処かで…。

「あなた達が悪い人じゃないのはわかったわ…でも、もう帰ったほうがいいわ」

「え？」

「”出る”んでしょ？ここ。ほら、もうすぐ日も落ちてくるわ」

彼女の指さす空を見上げると茜色に染まりかけている。

時計を見ると１８時を回っている。

いつの間にか3時間も経っていたのか…。

「じゃ…」

「あ、あの！君は…」

戻ろうとする彼女を無意識に呼び止めてしまった。

「那由多…白羽那由多…」

振り返る事無く、そう言うと彼女は再び家に入ってしまった。

那由多…か。

「なんか…変わった子だったな…マサキ」

「…」

「マサキ？」

「あ、ああ？なに？」

「あーもう！これだからこの男は…可愛い子には目がないんだから嫌になるぜ」

「そ、そんなんじゃないし」

動揺してるのか声が上ずってしまった自分がやたら恥ずかしかった。

「とりあえず、顔も拝めたし、日も暮れるし…帰りますか」

「そ、そうだな。帰ろう…」

自宅・自室――――

自分の名前言えなかったなぁ…とか、結局あの子のことで頭の中がいっぱいになってた帰り道。

結局、悠太との別れ際までの記憶がすっとんでる。

そんな悠太が最後に言ってた…

「凛を泣かせる事はすんなよ…」

ってのがちょっとひっかかるけど、あれ…なんだったんだろ…。

その前に話してたであろう内容が記憶にないからよくわかんないや…。

ボフッ

マサキはゆっくりとベッドに倒れこんだ。

「はぁ…。それにしても今日は疲れたなぁ…色々ありすぎて…疲れたぁ…寝るか……」

――

――

ジリリリリ！！

「！」

気づいたら朝になっていた。

「いちち…変な恰好で寝てたから…クビがいてぇ…」

今日は月曜日か…

！？

学校…！

８時…！？

「やっべ！！遅刻するっ…」

マサキは急いで着替えを済ませ、ドタバタと階段を駆け下りる！

「ねぇちゃん…なんで起こしてくれないんだよ！って…あれ？」

リビングには姉の姿がない。
いつもならこの時間ならここで飯食ってるはずなんだけど。

「あれ？」

『悪い！マサキ！今日はちょっと早く出社しないとなんで！ご飯ないんだ！
５００円置いとくから、それですませちゃって！　ねぇさんより』

「…はぁ。って、落ち着いてる場合じゃないや！鍵鍵鍵！！」

１０分後――――

「いってきまあああす！！」

慌てている時に限って必要なものが出てこないのはなんでなんだろう。

まったくもお！！

全速力で学校に向かうマサキ。

現在時刻８時２０分…始業時間８時３０分までに間に合うか…。

微妙なところである。

キンコーンカーンコーン！

「やっべえええ予鈴が鳴ってる！でもギリギリ間に合いそうだ！」

「蒼葉ぁ！急げよぉ！」

校門前で指導係の川崎先生が大声と手振りで急げ急げと言ってる。

言われなくても遅刻はごめんだ！

「は、はい！」

川センのお説教は長いし面倒なんだよほんと！
急いで靴を履き替え、急いで”Ｃクラス”に突入する。

ガラッ！！

「セ、セーフ！」

「何がセーフだ！蒼葉マサキ！この馬鹿者！時間みてみな！」
「はぁはぁ…８時…３２分……がぁぁっ…２分遅れ…たぁ…はぁはぁ…」

！！？

今…時計見たとき…先生がいた…けど…え…？

「悪かったなぁ。いきなり」
「いえ…」

ドクン…

そんな…

「皆さん、始めまして…白羽那由多です。今日からよろしくお願いします」

彼女がそこにいた。

全速力後の心臓の鼓動とは別にドキドキしていた自分がいたように思えた。

第一話　完

第一話　白羽那由多（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございました。
応援してもらえると嬉しいです＾＾

第二話　日常にサヨナラ（前書き）

とにかく自分が書きたいものを書いていこうと思います。
主人公同様、発展途中ですが、一緒に成長できたらと思います。

第二話　日常にサヨナラ

「んじゃー空いてる席テキトーに座ってちょうだい。皆仲良くしてあげるんだよ」

彼女は何も語らず、歩みを進め…こともあろうか俺の席に座ったではないか。

「あ、あのちょ！」

俺は思わず彼女に駆け寄った。

「う…その…あの、そこ…俺の席なんだよね…はは」

うわぁ…俺何緊張してんだよ。
赤面してるよな俺…絶対。

こいつ変な奴だと思われたよな…間違いなく…。

「…ごめん」

小さく一言つぶやいて彼女は席をたった。
そしてすっと俺の横を通って隣の席に移った。

「あの…その…ごめん」

「？…なんで君が謝るの？」

た、確かに…。

なんというか…雰囲気に負けてしまったというか…つい謝ってしまった。

バシッ！

いきなり頭上に痛みが走った。

この痛みには覚えあり…。

「なぁに、顔赤くして青春しとるんだお前は！そんなに青春したいなら…いっとく？」

担任、市原瑞希（いちはらみずき）…鬼の女教師…２８歳独身…。

得意技は出席簿チョップ…。

これが本当に痛いから困ったものである。

ちなみに”いっとく？”の意味は、そのまま…彼女の親指がさす方向を見れば一目瞭然。

――
――

「はぁッはぁッ…」

グラウンド１０周…朝から走りっぱなしである。
なぁにが青春だよ…。
今時こんなものが青春なものか…俺、泣きそうだ。
クラスのいい笑いの種だぜ。

――１限目終了／休憩時間

「あーーっ…もう疲れた…」

結局１０周したあとは廊下に立たされる羽目に…。
まったくついていない週はじめだ…。

「あはは。今日も体を張ったネタご馳走様でした！」

悠太が笑いながら近づいてきた。

「うっせーやい。好きで笑いとってんじゃないっての」

！

視界に彼女の横顔が入った。
どうやら読書しているようだ。

横顔も…

「…」

「…はぁ。おーいマサキ、何顔赤くしてみてるのかなぁ～？」

「ええ！？な、おま…！」

ふぅ…っといった感じで悠太が隣を向くと彼女の視線と同じになるようにしゃがんで見せた。

「や！…白羽…那由多ちゃんだったね。昨日ぶり」

「…あぁ…昨日の」

彼女は読んでいた本を閉じて、こちらをむいた。

「あの時は自己紹介まだだったよね。俺は浦川悠太！よろしくね」

「…よろしく」

「んで、こいつは」
「蒼葉マサキです…よ、よろしく」

思わず…手を出してしまった。
握手を求める右手…。

「…？」

彼女は特に手を差し伸べることもなく不思議そうな顔をしている。
そりゃそうだ。

俺はとっさに差し出した右手を頭にもっていった。

「は、はは…」

「那由多ちゃんは、都会のほうから来たの？」
「えぇ…都会といえば…都会かな？…今もそう呼べるかはわからないけど」

「え？…それって」

悠太がさらに聞こうとした瞬間、彼女は立ち上がってマサキを見下ろした。

「…蒼葉君……今日時間作れるかしら？」

いきなりの展開である。
彼女は立ち上がったまま教室を出て行ってしまった。

「ん～…なんか、何処となくとっつきにくいね。彼女」
「そうか？」
”やれやれ”といった顔でマサキを見る悠太。

「ねーねー！」
声をかけてきたのは同じクラスの黒峰（くろみね）　凛（りん）だ。
同じクラスではあるが、彼女は１つ年下の１年生だ。

うちの村は子供の数も年々減少傾向になり…。
今じゃ３年生が１０人、２年生が６人、１年生が４人といった感じで、
それぞれの学年で切っても１学年１クラスになる感じである。
もうどうせならってことで、今じゃ全学年をまとめて授業をしている。
授業は基本的にはテキストに従い勉強する感じで、わからないところは直接先生に聞く形だ。
それも今年まで…来年の春からは街の学校に移るから、学年別に戻

ると思う。

「どうした？凛」

「あの子、白羽…んーなんとかちゃん？」

「那由多だよ！な・ゆ・た！」

「なぁにムキになってるのよ！マサキにぃ！」

「べ、別にムキになってないし」

「こいつ、どうやらあの子が好きみたいなんだ。いわゆる一目惚れってやつ？」

「ふーん…そうなんだ」

ムスっとする凛。

「学校終わったあとも、”おデート”のお約束があるみたいだしな」

「な！おまッ…！」

「むぅ！会ったとたんデートだなんて…なんかマサキにぃって…いやらし…！」

そういうとプンプンと出て行ってしまった。

「はは！わりぃなマサキ」

「お前はどっちの味方だっつの」

「…なぁマサキ、お前凛のこと…」

「あぁん？」

「いや…なんでもない」

悠太？

「それにしても、あの那由多って子…もしかしたら”東京”からやってきたんじゃないかな」

「”東京”って…ついこないだ”謎の消失事件”の中心部の？」

今から2ヶ月ほど前かな。

東京という日本の中心都市が丸ごと”消えた”のだ。

まったくもって原因は不明…人はおろか、建物からなにから、大地を残して全て消えたって話だ。

元々”東京”は特別な場所で巨大な外壁で覆われた隔離都市だった。

だから俺たち田舎者にはそこがどんな所かもわからない。

ネットの情報じゃ、詳しいことは何も載ってなかったけど…

掲示板じゃ色々な説がささやかれていた。

何か未知のテクノロジーによる事故…異星人による襲撃…。

どれもこれも信じがたい内容ではあるが、悠太はこの手の話が大好きだから、いつも楽しそうに話している。

「ああ。なんとなく…だけどね」
「ふーん…まぁいいんじゃないか？何処からきたってさ」

「うわぁ…つまんない男だねぇ君はぁ！これだから都会モノは嫌だね」

悠太の言うとおり、実は俺も都会からやってきた移住者の一人。
3年前…中2の春だったかな。
夕羽螺町（ゆううらちょう）って割と大きい都市からここに引っ越してきた。

「なぁ悠太。すっかり忘れてたんだけどさ。昨日別れ際に言ってたよな？
”凛を泣かせる事はすんなよ”って…あれどういう意味なんだよ」

「…俺、そんな事言ったっけ？はは…」

「？…言ったと思うけど…」
「あのさ…」

悠太が言おうとした時だった。

キーンコーン…カーンコーン…。

「なっちまったよ。んじゃあとで聞くよ」

「あ、ああ」

いつの間にか彼女も席に戻っていたようだ。
なんだろう、存在感があるんだかないんだか…。

おうおう、凛の奴も睨んでるよ…。

「うっしゃあ！気合入れて二限目いくぞぉ！」

毎時間このテンションでよく続くな…と、瑞希先生をある意味尊敬している。

――
――

放課後――

「はぁーっ！終わったぁ！」

結局1限目の休憩時間に悠太が言いかけた事には触れないまま、1

日が終わってしまった。
まぁ…話したかったらむこうから切り出してくるよな。

「蒼葉君…いい？」

っと…そうだった。
那由多さんとの約束があったんだ。

「んと…一旦家に帰ってからにする？…それともこのまま行く？」
何処に行くのかしらないけど…行くって言ってしまった。

「そうね…これから向かいましょう」

「なになになぁにーー！デートなんて認めないんだからねっ！」
凛がズケズケと話に割り込んできた。
もめなきゃいいが…。

「…あなた、今日一日ずっと私を睨んでたみたいだけど…私何かした？」
「べ、別に睨んでなんかないわよっ！た、ただマサキにぃと…デ、デートとか小耳に挟んじゃって…
その…なんていうの！」

「気になるの？」
「むむ！なによ！その挑戦的な態度はぁ！喧嘩売ってるの！？私、こう見えて空手やってるんですから！
負けないんだからね！」
身長１５０ｃｍの凛が空手の”型”をかまえて見せても、やっぱりどこか弱弱しい。

「くすっ…あなた面白いわね」

笑った…。
彼女が笑みを浮かべたの初めて見たかも…。

「何がおかしいのよっ！」
「安心して…そんなんじゃないから」
そ、そんなんじゃないから…。
それはそれでショックです那由多さん…。

「そ、そうなの！？悠にぃ…！！」
背後でコッソリ逃げようとしている悠太の肩が震え上がった。
「あ、あはは…」

「何処行くきぃやぁ…こらぁぁぁッ！！」

逃げる悠太、追う凛…。
とにもかくにも煩い連中はいなくなった。

「…んじゃ…どうしよっか…？」
「私について来てくれればいいわ」

そういうと彼女はカバンを持って教室を出ようと歩みだした。

「あ、ちょっと！」

マイペース…なのかな…。

俺は慌ててカバンに教科書類を詰め込み彼女を追った。

――
――

何処にいくんだろう。
彼女は何も語らぬまま歩き続けている。

この道は間違いなく彼女の自宅に向かっているかと思われるが…。

「こっち…」

そういうと、山道をそれて木々が連なる方向へ歩み出した。

この時、俺はあの場所を思い出していた。

そう、昨日見た謎の洞穴だ。

結局勇気が出ずに足を踏み込むことはできなかったけど…次にまた同じ場所に…この子といけたなら。

その時は…。

「！…」

彼女は急に足を止めた。

「どうしたの？」

「……」

彼女は目を閉じて…何かに集中しているようだ。

「話をしている時間がなくなったわ…ついて来て」
すっ…と目を開いたかと思うと、彼女はそういって走り出した。

「え、ちょ！」

速い…！
彼女足が半端なく速い…！

俺も速いけど…その俺がついてくだけでいっぱいいっぱいだなんて…。

なんなんだ…
なんなんだよ那由多さん！

「はぁ…ッ…はぁッ…」

前方で彼女が立ち止まっている。

「はぁ…はぁ……速いね…白羽さん…はぁはぁ…」
「巻き込みたくなかったのにね…関係ない人は」

「え？」

彼女の視線の先には、もがきながら宙を浮く悠太の姿と、怯える凛の姿があった。

「悠太ぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」

第二話　完

第二話　日常にサヨナラ（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございました。
応援してもらえると嬉しいです＾＾

第三話　闇の強襲（前書き）

突如として窮地に立たされる悠太…彼の命運はいかに？

第三話　闇の強襲

宙に浮かぶ悠太は苦悶の表情を浮かべている。

「悠太ぁぁぁッ！！」

マサキは立ち止まる那由多を尻目に、急いで悠太の元へ駆け寄った。

「！」

近づいてマサキは気づいた。
悠太は宙に浮いている…というよりも…
”何者か”によって首を掴まれ、持ち上げられているといったほうが正しいだろう。

その”何者か”とは、まさに特定困難な…何者か…としか形容できない存在。

簡単に言い表すとすれば、それは”影”。

そう、人の形をした黒い霧のような…影。

「な、なんなんだ…こいつッ…！」

マサキは震えていた。
目前では不可思議な現象と、死の淵に立つ親友…。
混乱する。
悪夢なのかと思うほどに。

「う…うぅ…あああぁぁッ！！」

マサキは無我夢中で、謎の影に体当たりをした。
ドガッ！！
マサキと共に影は倒れこんだ。
同時に悠太も地面に倒れこむ。

「はぁ…はぁッ…！」
当たった…。

「悠太…！」
駆け寄ると、悠太の首筋には何者かの手のような跡がくっきりと残っていた。
黒く不気味な痣だ…。
「ガハッ…はぁ…はぁ……サキ…」

瀕死には違いないだろうが、無事のようだ。

「！」

背後に気配を感じた…と思うやいなや右肩に激痛が走る。

「ぐああッ…！！」

マサキの右肩を黒い針のような細長いものが貫いている。
それは”影”から伸びたものであった。

『…何故…我の存在に干渉できる？』

「な、なんだ…こいつ…しゃべった…？」

『我の言葉を理解するか。こいつは面白い』

そういうと影はマサキの右肩を貫いている針のようなものを縮めて抜いた。

「う…」

『お前は…”地球人”のようだな。純粋なる地球人か…』

「ち、地球人って…何言ってるんだ……こいつ」

影に目や口など見えないが…人の形をしているソレは、頭の向きを変えた。

白羽那由多を見ているように感じた。

『お前も…”地球人”のようだな』

お前も地球人…？何を言っているんだ…。

「…。レヴ・ストラゥク……この地の者か…？」

『！……なるほど…お前”管理者”…もしくは”メスト”の者か？』

「”管理者”でもなければ”メスト”でもない。私はメストを止めにきた…そして、彼を守るためにきた」

しゃがみこむマサキを見下ろしながら彼女は言った。

…白羽…那由多……君は一体…。

『ほう……外からわざわざやってきたというわけだ。

確かに…地球人に対抗できるのは地球人というわけか…ククク』

「私の質問に答えるんだ…。お前はこの地の者か？」

一体何なんだ…この化け物と彼女…関係があるのか？
マサキは悠太を引きずり、腰を抜かしている凛の元へ静かに寄り添った。

（悠太…大丈夫か…？）
（ああ……。なん……とかな…。り、凛は…無…事？）
（凛は大丈夫…気を失ってるみたいだけど…怪我もしてなさそうだ）
（そ…っか……悪い…少し……休む…）

そういうと悠太は気を失った。

影と那由多は距離を保ちつつ対峙したままだ。

『そうだ…。我は長くこの土地に存在していた…誰に知られる事もなくな』

「なぜ…人間を襲った…。お前たちは管理者のもと監視されているはずだ…
下手なことをすればどうなるか…わからないわけではないだろう」

メスト…管理者…

一体なんの話をしているんだ…？

『黙れ…！奴らが…メストがこの地に戻ってくる…それ、すなわち…死を意味する』

「メストの名を知るところをみれば…2ヶ月前のメッセージ……知ったというわけか…」

『あぁ…奴らの宣戦布告…この星に住む異星人全てが知ったさ…。そして悟った。

死を…確実な死をな』

「死を悟った末の暴挙か…愚かな…」

『教えてやる…あのメッセージを受け…我々がどういう行動に出るかをだ。

1つ…死を受け入れ…その時を待つ…。

2つ…死から逃れるため…この星から離れる…。

そして3つ…我を含め、この選択肢を選ぶ者は多いぞ…』

「人間を襲う…か」

『その通り』

「馬鹿げている！一体それに何の意味がある！」

彼女は珍しく語気を荒げ、感情をむき出しにした。

『生き残るためだ…こいつらから得られるエネルギーを奪い続ければ…奴らにむざむざ殺されずにすむ』
「奴らが来る前に管理者に抹殺されるのが解らないの？」

『くく…めでたいな』
「なに…？……まさか…！」

『噂だがな…逃げたそうだぞ？くく…』
「そこまでして…命がおしいか……この星に住むものはどうでもいいということなのか…」

『一度はメストを裏切り、”こいつら”に媚を売り……危うくなれば、再び裏切る…』

こいつら…影は倒れている悠太を指さしてそう言った。

「…一体…なんなんだよ……白羽さん…俺にはわからない事だらけだ…。
なんで悠太はこんな目にあわなきゃならなかったんだ？そいつは一体なんなんだ？
君は一体…メスト？管理者？……一体何を言ってるんだよ…」

「蒼葉マサキ…今は説明出来かねる……。
君に話さなければならない事は沢山あるし、話すつもりで君を誘

った」

『地球人よ…お前は管理者でもなければメストでもない…ならば、我のする事に手を出す理由もあるまい』

影は悠太に向けていた指を那由多に向けた。

「…そうだな」

『お前達、地球人にとっては”ゼクト・フェフ・シャグナ”は宿敵のようなもの…別にどうしようが構わない
我は食う…そして生き延びて見せる』

そう言うと影は再び悠太にその手を伸ばした！

「な！」

なんと今度は悠太だけでなく、凛をも同時に締め上げている。
首を鷲づかみにされるというよりも、巻きつくといった感じか…。
そのまま徐々に二人の体は宙へといざなわれる。

「や、やめろおぉぉ！！」
『黙れ…地球人の出来損ないめ！』

右肩を抑えながら影に立ち向かおうとするマサキに対し、影は

人でいう腹部にあたる部分から、先ほど同様に針のようなものを伸ばしてきた。

マサキにそれをかわせるはずもなく、そのまま腹部を貫いた。

「がはっ…ッ」

「！…マサキ…く…」

那由多は表情を変えるも、助けようとはしなかった。

『…ふん…脆弱也…。やはり純粋種の地球人とはいえ、力が覚醒していぬ者はこの程度だ。
ゼクト・フェフ・シャグナと身体能力においてさほどの差はないな。…死ね』

影は腹部からだけでなく全身から針を一斉に発した！

マサキはその時…死を覚悟した。

――――

「…え？」

痛みがない…そのはずである。

「那由多…さん」

彼女が間に入って攻撃を受け止めていた。

「…」

ドサッ

那由多はその場に倒れこんだ。

『愚かなり。割って入らずとも、後で殺してやったものを』

「そんな…なんで……」

彼女はゆっくり目を開けた。

「…ごめんなさい……あなたを巻き込んで…」

血が…流れてる…。
白い学生服が血に染まっていく…。

「もう…もうしゃべらないで…」

「…私の…ことより…二人を…」

はっ…！
そうだった…！

影に締め上げられてる二人の生死はわからなかった。
とにかく早く助けなきゃ…！

「！」

ドサッ！

一瞬目がかすんだかと思うと、その場に倒れこんでしまった。

そうだった…俺…右肩と…腹…貫かれてたんだっけ……。

やばい…意識が…。

俺は、誰も救えないんだ……。

このまま…

死ぬ…のか？

なんだろ…なんか…眠くなってきた。

「…生きて……」

彼女が俺の手を握った…。

何故だろう…本当によくわからないけど。

その時…

力が…

力が戻ったんだ。

「その手を…離せやぁぁぁあッ！！」

『！！』

マサキの体当たりで影は吹き飛んだ。

同時に二人は地面に落下した。

「はぁ…はぁ…ッ…」

マサキは二人の呼吸を確かめた。

「…そんな……」

『くく…遅かったようだな…』

二人の呼吸は…

止まっていた。

第三話　完

第三話　闇の強襲（後書き）

最後まで読んでいただきましてありがとうございました！

第四話　フェスーＦｅＳー　覚醒（前書き）

親友の死…マサキは怒りと悲しみの中、力に目覚める…

第四話　フェスーＦｅＳー　覚醒

「そんな…嘘…だろ…」

悠太と凛が死んだ。

呼吸をしていない。

白羽那由多…彼女も倒れたまま動かない。

『悲しむ必要はないぞ…お前もすぐに死ぬのだから』

頭の中がホワイトアウトしていくのがわかった。

「うぅ…うわぁあああああああああああああああッッ！！！！！」

『！！』

マサキは天を仰ぎ雄叫びをあげた。

怒りに我を忘れるマサキ。
その目には殺意の灯が灯っていた。
同時に飛び出していた。

「殺す…！！お前だけは…許せないッ！！」

『ふん…死ぬのはお前だ』

影はお馴染みの針攻撃を放つ。
針は正面から来るマサキの胸を貫いた。

『！…感触がない…？』

マサキが薄らいでいく。
そう、影が貫いたのは残像だった。

ドガッ！！

『！！』

異変に気づいた時には、影に衝撃が走っていた。
空中より落下しながらの蹴りが見事に影の頭部と思われる場所にヒ

ットしたのだ。
影は３、４ｍほど吹き飛ばされた。
『…馬鹿な…今の動き……まさか！？』
ガシッ
マサキは倒れる影の腕を掴んでいた。
「消えろよ…！！」
『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！』
影の…そう。マサキが掴んでいた部分が”消滅”した。
影は凄まじい悲鳴を上げる。
霧のような…血飛沫を上げながら。
「殺す……」
『……その目……やはり……お前は地球人だな…冷酷な目だ…』
「何が…何が冷酷だッ！今お前がしたことは何だって言うんだッ！！
二人が何をした！なんで殺したッ！」

『…今のお前を殺すことは出来ない…か。いいだろう…殺せ』

この瞬間、急に冷静な自分が帰ってきた。

「はぁ…はぁ……」

『どうした…？殺さないのか？…我はお前の仲間を殺したのだぞ？
憎いはずだ。そうだろう？殺したいほどに憎いはずだ。やるがい
い。誰も咎めない。
ましてや我はお前達からすれば異形なる存在…なにもためらうこ
とはない』

「だまれ…だまれよ……」

『怖いのか？お前達は殺しているではないか。虫や…動物を…なん
の罪悪感もなく』

「一緒に…するな…くそ……なんで」

マサキは涙がこぼれてきた。
友人の死…仇を討てない自分自身…

『…くく…ためらうな。…今のお前なら…こう強く願えば…それで
我を殺せる…

”死ね”と…俺を見つめながら心の底からそう願え…それで終わる』

「くそ…ッ！なんなんだよ…お前は！」

悠太

凛

那由多

ごめん…

「それでいいわ」

「え…？」

那由多が立ち上がっている。

「無事…なのか…？」

「マサキ…ごめんね」

ごめんねって…。

「！」

彼女が俺を抱きしめる。

「え…え……ちょ」

その瞬間、暖かい光に包まれた。

「これは…傷が…！？」

右肩も…腹も…傷がふさがっていく。

「これでいいわ…二人も無事よ」

「！」

俺はすぐに二人に駆け寄った。

二人は気を失っているようだが、首の痣も消え、普通に呼吸をしている。

「白羽…那由多…君はいったい…」

『くくくく！！我は見事にダシに使われたというわけか…』

「マサキ…あなたには悪いことをしたと思ってる……一生恨んでもらってかまわない」

「な、何をいってるんだ…どういうことなのか説明してくれよ」

『その女は…お前の力の覚醒のために、わざとそこの二人を助けなかったのだ』

え？

「その通りだ。私がその気になれば、二人を即座に救いだし、このレヴ・ストラゥクを倒すことも出来た…。
君を傷つけることも…彼らを苦しめることもなかった」

「そんな…！なんでだよ！……力があるのに黙って見てたってわけかよ…
俺達、”友達”じゃないのか…」

マサキはその場にひざをつき、両手を地面につけた。

「…全ては君を守るため…。私を憎んでもらってもかまわない…」
「俺を守るためって…一体何なんだよ…。一から説明してくれ！」
「いいだろう…もともと全てを話すつもりだったんだ。だが少し待って欲しい」
そういうと彼女は影に近寄った。
『！…なにをする…』
「癒す」
再び彼女は暖かい光を放つ。
すると先ほどマサキが消し去った影の手が繋がったではないか。
『なんの真似だ…』
「お前はこの地に住んでいるといったな。
私がこの地に来るとき過去の記録を見た。神隠しによる行方不明や謎の怪死がないかをな。
そして管理者によって拘束された記録もだ…。結果はシロ…この地にそういった事件はなかった。
つまりお前は今回が初犯なわけだ…レヴ・ストラゥクの者よ」
『…初犯だから…見逃すというのか？これは地球人とは思えぬ甘い発言だな』
「私は管理者ではない…。お前を裁く権限もない。それに、お前の

暴挙の理由は私達のせいでもある…」

「なんかよくわからないけど…だからといってコイツが二人を殺そうとしたんだぞ！？
お咎めなしなんて言わせない…！」

『そいつの言うとおりだな…。我は生きるために当然のことをした…。
だが、その理屈はこいつらには関係のないことだ。納得などできるはずもない』

「ここでお前を逃したら…同じことをするのか？」

『ああ…我は生きるため、襲い続けるさ。そんな奴を放っておくお前もある種の同罪だな…くく』

「そんな事はさせないさ…。お前は私達と共に戦う仲間になるんだ」

な、仲間…！？

『…何を言っているのか理解できないな』

「メストと戦おう…私と一緒に。そちらのほうが、まだ可能性があると思わないか？」

『…』

「私はこの星にいる力を可能な限り集めるつもりだ。
彼のような純粋種の地球人や、お前のような異星人の力を集める
…そしてこの星を…地球を守る」

「…こいつや、君…そしてその不思議な力を見たから……恐らく君の言ってる話は全部本当なんだと思う…。
まだ、ピンと来ない部分もあるし、正直話の規模がでかすぎて、俺には漫画か小説のような話に思う」

「…そうだと思う。それが普通の反応だ」

「今までの話の流れで…俺が理解できたのは…
この地球に、悪い異星人?メスト星人?が攻めてくる…。
んで、そいつらはそこの影が恐れるほどにめちゃくちゃ強くて、
んでもってそいつは死にたくなくて
悠太と凛を襲った。エネルギーを得るために。
んで、君はよくわからないけど、どっかの星から来た”チキュージン”なわけで、メスト星人から
この地球を守ってくれる救世主ってこと?
そんでもって、この星にはその影みたいな宇宙人がいっぱい住んでて、そいつらの力を借りて戦おうってわけだ」

『…』

「はぁ…。悪かった。ちゃんと説明する」

「ち、違ってたか」

「メストは星の名前ではない…組織の名前だ。
遥か昔、この地球から外宇宙に逃げ出した地球人…その一部の過激派がメストと名乗り、
この星を取り返しに向かってきている」

「…地球から逃げ出した…？」

「信じられない話だとは思うが５０００年以上昔…地球人は一度絶滅の危機にあった。
彼らの祖先”ゼクト・フェフ・シャグナ”という異星人によってな」

「え…悠太や凛が…異星人？」

「あぁ。見た目こそかわらないし、今までの交わりの繰り返しで多少地球人の血が混じってはいると思うが
純粋なる地球人ではない。地球人であるかどうか…これは純粋なる地球人同士にしかわからないことだけどね」

『それと我のような異星人だな…。”ゼクト・フェフ・シャグナ”の血を持つ者は我に干渉することはできぬ。
だから、お前が我に干渉したとき…すぐに地球人であると理解し

た。
我のように不干渉領域を持つ異星人は多い。お前達の世界で妖怪といった類の存在…あれは異星人だ。
いまやこの星には”ゼクト・フェフ・シャグナ”の血を持つものがほとんどだ。
それゆえ、奴らに干渉することができないため…一部の、お前のような純粋種の地球人が目撃する例があるのだ』

「私は地球育ちではないが、純粋種の地球人だ。だからこそわかる。君は純粋な地球人だ。君の両親も、その親達も…先祖代々…な」

「…いまひとつピンと来ないな。だって俺も悠太も…見た目に違いなんてない…人間だよ。
それに悠太たちの祖先が…地球人を絶滅の危機においやったって…」

信じられるわけがない…。

「その辺りの話を今した所で信じれないだろうし混乱するだろうな…悪かった。
とにかく奴らメストは確実にこちらに向かっている…。2ヶ月前、東京消失…あれはメストによるメッセージ。
この星に住む管理者たちへ…この星に住む異星人たちへ…」

「！…あれがそうなのか…」

「東京…あの隔離地帯は管理者の本拠地でもあった。…抵抗力を削ぐ上でも効果的だったはず」

「その、さっきから出てくる管理者ってのはなんなんだ？」

「この星の真実を代々受け継いでいる純粋種からなる地球人の一派…。

その昔、”ゼクト・フェフ・シャグナ”に地球人が滅ぼされたとき、彼らに命乞いをして助かった地球人たちよ」

「…俺の先祖も…管理者ってことか…」

「そうとも限らないわ。偶然助かった人たちもいると思うし。

彼らはこの星の”安定”を求めた。…この星に害するであろう異星人は滅する…」

「…メストは…つまり地球人なんだろ？…そんで…この星を取り返しに来る…。

やり方は暴力的かもしれないけど、元々はゼク…なんちゃらがこの星に攻めてきて乗っ取ったんだろ？」

信じられないけど…。

「そうだ。だが…奴らは暴力的なんてものじゃない。全てを滅ぼす

つもりでいるんだ。
人と名のつく、知性あるもの全てをだ…。虐殺以外の何者でもない…」

「それにしても…どうやったのかわかんないけど東京を一瞬で消せる力があるんだろ？
だったらそれを地球全土にわたってやれば、わざわざ攻めてこなくても終わりじゃないの？」

「その辺りについてはわかっていないけど…メッセージでは直接この星に来ると言っていた…」

「いつ頃…やってくるの…？」

「正確な日数はわからないが、奴らは1年後には全ての戦力を送り込むといっていた…。
先陣部隊が送られてくると考えると…ひと月後にはやって来るかもしれないな」

「そ、そんな！この星の軍隊とかでどうにかなるレベルなの？」
「どうにもならないと思う…。相手は私達と同じ地球人だもの…。
”フェス使い”ばかりでしょうね」

「フェス…使い？」

「あなたもさっき使ったでしょう？彼の腕を吹き飛ばした、あれよ」

あの…力…！

「偶然…じゃなかった…のか？」

「想いを力に変える…思念力からなる特殊な能力よ。
フェスは想いによって様々な効力を発揮する。
あなたはさっき、彼に消えて欲しいと願った。その結果が腕の消失」

「…確かに…」

「私は治癒したいと強く願った。それがその結果よ」

「すごい…夢のような力だね…」

「そうでもないわ。何もかも自由になるわけじゃないし、使い方によっては自滅する。
陰の感情から湧き出る破壊の力は、使い続ければ闇に飲まれ発狂して死に至るし…
陽の感情から湧き出る癒しの力は、自身の命を削るもの…こちらも酷使すれば当然…死に至る」

「そんな…！俺もやばいの？てか君もか」

「大丈夫…そこまでの影響はないわ。今のところはね。
とにかく万能じゃないことは覚えておいて」

「あ、ああ…」

「フェス使い同士の戦いは想いの強いほうが勝つ…。
想いで負けると…死に繋がる」

「というか…今更だけど…
俺、戦うことになってる…？」

「？…何を今更」

へ…。

第四話　完

第四話　フェスーＦｅＳー　覚醒（後書き）

いつも読んでくれてありがとうございます＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9460g/

世界交差点　World×Intersection

2010年10月14日15時49分発行